なして來ると、

反對に文化創造の

方向に大きな力を有つと考へら

たさしはさむ餘地はないのであり れたのであって、私の如き者の嘴

Ш

は如

何なる態度で為され

るか

と思ってゐます。次にこのやうな

「山岳」誌上に發表の豫定の報

か經過し、あるまとまつた型態を

う一つこゝに付け加へればならな

つて來たのは當然であります。

いのは、文化の産物は、それが何年



會 岳 Ш 本 H

> 科學的なもの、或は體育的なもの とによって生じた精神的なもの、

就いての理解となり、觀賞とな

によって始まり、

次に山に登るこ

111

十年六十和昭 月

るかな考へるには、現在行はれて

登山の本質が如何なるものであ

答 Щ

の

本 質

闊 根

個人に就いて言ふなら ば我 が身 の一つとして生れたものであって 文化に依りて生じた空隙の充填劑 な言ひ方ですが、 す。私はこれに依つて、少しく氣障 が比較的妥當な方法だと信じま 地方の登山家の型とな觀察するの 及び良く發達してゐると思はれる 必要であり、それには登山の歴史 ある登山はどうして起り、<br />
發展し 來たかな思ひ起してみることが 現在地理的に見た普及の狀態 登山は膨脹する

く現はれてゐるかといふに過ぎな てあるのではなく、何處に色が濃 す。

と思います。自然の山岳に於て行 味と呼ばれるものに成長して行く 平衝調和を保たんがために行は れる登山は先づ自然の理解觀賞 この種の文化の産物は必ず趣 あの壁を登らうと、それ迄に岩登 立派な登山でありませう。 心の調和が保たれるなら、それも 年廻る四季と共に其處を訪れ、そ 見た山の景色が美しいからと、 はないと考へます。何處の峠から が登山の本質であることには變り れによって生活に色彩が與へられ いことは勿論であり、この三つ共 來年は

每

いては、 はありません。これらの登山に就 り他に强要さるべき性質のもので つて、どこ迄も主親的のものであ 然と個人、登山と個人のものであ 面白ければそれもいい、それは自 合って、その岩壁は登る、それで よいとか、靴は何がよいとか言ひ りの技術を向上させ、網はどれが 多くの先輩達が語り港さ 告文から大體はわかつて戴けるか 來ないのです。今後二三回に渉つ て戴くより他には簡單に説明が出 ありませんが、一緒に山に來て見

ますが、この三つは互ひに獨立し てゐるのを見逃し難いのでありま 近年この方向に一部の鉾先が向い てから既に百年に近い登山界は、 るのであり、モンプランが登られ く三大別することが出來ると思ひ 要するに私は登山を以上の如 吉 郞 後に考へられる登山に就いてであ 私の敢て一言したいのは、 す。

稱されるものに於ては體力より文 を持つものだと考へるに到りまし 如き體育會山岳部は此の如き目標 化への途があると思はれ、私共の りますが、登山等所謂スポーツと が普通には考へられて來たのであ する途としては精神とか科學とか さうしてこの客觀的なものに到達 るのであると言はれてかります。 なくて客觀的目的のために物を造 觀的目的のために物を造るのでは 行動といかのも哲學者は、單に主 は客觀的價値であります。文化的 然に對するものであり、その內容 とはことに説明する迄らなく、 ります。先にこれを文化創造に向 いてゐる登山と言ひました。 文化 自 ◇登山年譜資料管見…… ◇富士二題……谷

どんな山登りかと云ふと以前と特 別に變つたところがあるわけでは ふ をもありません。それでは一體 獨立してあるものでないことは言 三つを區別しましたがこれも各々 た。又こゝに精神、科學、體力と ◇山の名・山の地名(八)… ◇南スマトラ ◇上高地より……福田嘉四郎 ◇南アの北又峽谷……… ◇立山登山……中島 ◇圖書紹介、 會員通信、會務報告、 :....福井幸男譯…10!スマトラ デンポ山(上) ……三田尾松太郎… 會員ノ摩、山岳部欄 竹 潭… 耕…10

九 Л

りません。凡て客觀的價値に至る である如く、 1: 場で滿足する登山をやるのではあ 6 0 は或る程度の天分と精進が必要 L. ある程度の天分は必要であり ある程度の精進が强要さ 私が部の登山に於て

その 就て一言します。 В 客觀的目的と

登山な順次行つて行くだけであり て、部の部員は部の目標に從つた 標を持つたものと考へるのであつ は部といふものが既に明瞭なる目 單に部員が面白がる登山を、

◇本邦氷河問題の回顧 ◇北大の人々を憶ひて… ◇登山と戦争…G·W・ヤング… ◇白馬嶽の頂上から…… ◇登山の本質…… 次 冠 根 松次郎… 達 古 夫… 郎 昗 三 = =

博::

-Æ,

れでも登山は甚だ複雑で

が軌道に乗つて來たやうです。 うやら自分の部らしい登山と訓 苦闘して來ましたが、近頃ではど あって、どうして登山者の天分を のか示された手本もなく悪職 如何なる方法で精進したら

があて、 らは登山の途中に於て起り出 獨斷される方もありますが、これ 下げた登山こそ眞の山であるとか る位置を正確に知り、自分の登山 登山者自身が各自の登山界に於け 自の本質を生かすことです。 なりません。それには登山者が各 るものでなく、常に多くの理解者 へるのは變であります。 るものであつて、それか本質と 本質であるとか、内面を深く掘 目標を出來るだけ立派にし遂げ 文化は唯創造者のみでは成立す これを擁護して行かれば 山との闘争こそ登山 結局

りませう。 進した後に始めて出來るものであ るものでなく、天分のある者が精 あるとか云ふだけでは決して出來 は唯好きだとか、 等と云つて 街氣が多過ぎては自然、 も真に深味のあ 何十年の經験が るもの

誤りも多いでせうから會員諸先輩 事を少しまとめてみただけです。 登山の型に就いて今迄考へてゐた 強をするよりも無理な話でした。 熟な私にはエヴェレスト登山の計 でありました。正當な哲學の教育 山の本質と國家的意義」といふの 立派な社會としたいものです。 の點に留意して、 造されません。登山界はこの二つ 分精進が不足してゐては文化は創に理解・觀賞することは出來す、天 も受けず、哲學的思索の至つて 御 編輯者から與へられた題は「登 一訂正なお願ひします。 他の社會よりも 未

> 白馬 岳の頂 Ŀ かっ 3

(九月八日)

冠 松 次 郎

かに淋しかつたやうだ。 やらない為、 なつてゐるのと、天狗原から神ノ も七十パーセント位に達したらし 蓮華温泉なども昨年に比して遙 の方面からする登山者は殆どな 甫を經て落倉に下る道が苅取 比すれば大分少ないが、そ 登山期も終りに近い八月二十八 今夏の白馬岳は去年の登山者數 大池の小屋が牛壊したま」に 笹が茂つて歩き悪く

> て死んでゐ 午後小屋を出て行つたなり 不

小さく人らしい物が横はつてゐる がかょってゐた。その又下の方に と、それが墜死した者の遺骸であ やうだ。それから望遠鏡で見る 足跡が見え、遙か下の岩角に帽子 つた。それから北側の嶄岩に包ま 手拭を結んだ杖が頂上に置いてあ 審を抱いて頂上へ行つて見ると、 になつても歸つて來ないので、 ることを確めたのである。 れた谷の方を見ると、頂上の下に

すよい鹽梅だと喜んでゐた頂上の に遭つた譯だ。 小屋の者もこの事件の爲非常な目 惡場に下り漸く死骸を運び上 案内六人を選つて頂上からザイ か吊して、あの物凄い信州側の 小屋では大騒ぎになって、 今年は幸ひと何の事故ら起さ 屈 げ 强

Щ であるが、 頂 山下の强力でそれを揚げる位のも 擧げられずに昨年から二俣へ置い たなりになつてゐた。生憎と白馬 五十貫のものが七ツ程どうしても 盤が、この九月八日に漸く完成し は應召されてゐないので富士山 進君な呼び寄せて揚げさせたの の觀測所へ荷を上げる强力小見 白馬岳の絶巓に建てた風景指 石の切り方が大きかつた為四 何しろ四五十貫もある 示

> ムつて漸く揚げたのである。 るやうな辛さな堪えて二十日もか 布から血が滲み出る肩骨に喰ひ入 腰の皮膚が破れて腰に厚く卷いた で選ぶのであるから、石の重みで 解けた跡のザクの坂を上つて頂ま 大雪溪を上り更に急な小雪溪の 谷心横ぎり尾根な越え、 馬岳の展望は日本アルプスの そ

Assess Assess

ことが出來る課だ。 の頂から見える程の名山を皆知る 成によつて、天氣さへよければこ それを見て喜ぶばかりで、 登山者は、 優れてゐるのであるが、大部分の は殆どない。併しこの指示盤の 山の個々の名を一々指摘出來る者 中でも他に比較するものがない位 たびよい山の眺めだと その 完

らどうか今後は疵なつけないやう て登山者の爲に建てた物であるか 甚だしいのは職場と自分の名をナ イフで切りつけた馬鹿者がある。 付けたプロンズ製の地名の方向盤 か半歳も經たない内に、上に取り とバノラマ台のものは出來ると僅 景指示盤な完成した。併し三ツ峠 の三少峠、パノラマ台、今回又立 へ石かピッケルの先で穴を明け、 角非常な努力と相當な金をかけ 白馬岳、富士山頂と三つの 登山者自身の物だと思つて大

大の人々を憶ひて

北

望 月 達 夫 (筆者は早大山岳部部員)

山の八十の山襞奥ふかみいかしく聳ゆペテガリの の空晴れて雲なし日高なる高峯の雪の清らけき

北のくにさむさは早し緑なす草々の上に初霜の降 秋の野に咲き残りたる一もとのタンポ、の 高なる奥津城の山よ心あらばれむれる人の便りもらせよ 花あはれにも見ゆ

岳の絶嶺から信州側へ落ちたので

に遭難者があつた。それは白馬

四百米突も下で滅茶滅茶にな

尚岩の丸い形をしたのを背負つ

にして頂きたいと思ふ。

國立公園協會では曩に富士山

### 本 邦 氷 河 問 題 の 顧 田

# 中

薫

して梓川の谷へ殺倒するか又は、

それを思ひ出して記す事とする。 に應じてゐる様に思はれるので、 した事柄が、丁度此場合、 關西學生山岳聯盟の例會で、 前奏曲を書けとの事である。今夏 の氷河」が上映されるに就いて、 秋の大會に、 私の關係した お求め 「日本 お話

に依つて、 本物であるか偽物であるかの鑑別 のであって、 日本には固より現實の氷河は無い 遺跡だけである。 既往の氷河の存否が定 問題となるのは氷河 此の氷河遺跡が

氷河問題の起

D. に考へ、それよりも先づ、 だから此の人々は專ら地形にたよ つた最初から今日まで一貫して最 も多くの人々の頭を領してゐた。 あった。此の人々は理論な氣候 5 此に對して地形を第二義的 能性の検討に事念した人々 本邦に氷河の存したといふ 理論上 次に氷河の規模の大小に就いては られて來たのである。 7

者は先づ氣候派と呼ばる可きであ 前者を地形派と呼べば後 實験を比較地形學にた

って、 定する人々や、 本邦氷河問題といふもの 揶揄する人々があ 頭から氷河 か否

> はしたものである。 治年代此の方、 大 學界を賑

れて來た。 にか兩方から氷河肯定の論調が生 合って來たのであるが、いつの間 なく寧ろ多くの場合お互に加味し 偖て此の二つの學派は決してお互 純然たる對立なして來たのでは

大氷河論といふのは、

日本の

南は臺灣中央山脈といふ風に、 州では日本アルプス、西は北朝鮮 分布に就いては、北は北海道、 夫 本 に置かれる様になつた。 その氷河の分布と、規模との

度肯定されると問題の中心は、

山の頂きに近く、曾つて雪線に接 って、 真實性が確められて來たことによ 觸した地域の分布してゐる事が知 々の地方に發見された氷河遺跡の 北から南に向つて次第に高い 我國は、 緯度の高低に應じ

-C 大、中、小の三段の説が行はれた。 初は中氷河論で、次は大氷河論 最近は小氷河論に落着い

河は谷氷河となつて、アレッチ氷 0) プスで云ふならけ、 氷河論といふのは例へば日 様に上高地を埋め、 槍穂高の氷 白龍と化 本ア

ある。 7 である。が要するに此は山岳氷河 説であり、 の小丘がその氷河遺跡となるらの てゐるかの類な認めることであつ 上高地の温泉あたりで踏み止まつ 彼のヘツトナー石や、上高地 谷氷河説であったので

場合の氷河は内陸氷河に 見されると云ふのであった。 所からも氷河礫として到る處に發 もので、その遺跡は海面に近い低 地域が、 とか本州の日本海斜面とかいふ大 氷盤の下にあつたと見 近いもの 此の

間

題

けることになった。そして山の事 為にまたまた故郷を後にして出掛 變が起きた。私はそれを迎へ撃つ 小氷河論といふのは、 であるとされた。 ・・それから三日して今度の事 中氷河なそ

た考へながら私は、 「登山は世間

登山と戦争につい G W • ン 7 ガ

結局は平和な生活への選げ口上で 質として認めるのではないかと、 あり自己欺瞞に過ぎないのではな 確かに外見は冒険的であるのだが . 人々が山に水める體験といふのも 般でもさう考へられてゐるし、 か」といふ疑問を今度こそは事

怒 0 る程度なのである。 ばかり溢れ出してゐるものな認め ものである。だから圏谷氷河が谷 氷河としても、或る圏谷から少し 一谷附近まで追ひ込んでしまった 源流まで極端にしぼり上げて、

外の實例から餘りかけ離れてゐな 持されてゐス事。又氣候的には海 には確實な氷河遺跡の数多くに支 ては、 である。が、此は學者の云ひ草とし 見て、學說として安全率の高い事 小氷河論の强みは第一に常識から 許されまい。矢張り地形的

になることだけは確實だった。數 大いに興味なもちながら立ち向つ 第一に擧げられたが、その他は堆 遺跡は大型なものとしては圏谷が 偖て小氷河といふ事になると氷河 ケ月ならずして、戦争の不安な熱 と威嚇して來る危險に身か曝す様 とは即ち、 たのであった。戦争の渦中に入る おしかぶさる様に次々

を得たのだった。 病狀態や、深い苦悶に直面した私 例の疑問に對して完全な解答

Ħ 間奪掠を行つた私がかつては一日イベルン(ベルギーの街)で一週 マツターホルンに登つて樂しんだ 前の事象について考へた結果は 從へさせられ、危險な嫌はしい 同じ様に、今この不自然な權力

人達の鋭い合唱の磨も亦豊かに

輕んぜられることな。(吉阪課)

てなれば足り又地域が残ったため に、近接して發見される可能性が f 石堤にしても、 極めて小規模のものが、 氷河研磨面にして 残っ

て來たのであ を作る事<br />
も近き將來に可能になっ のであつて、既往氷河の復舊闘等 大きく、調査も比較的容易となる

られたのであって、同氏の近著「日 此の仕事は今村學郎氏が熱心にや 愈々面白くなつて來るのである。 のものであるらしい事が判ったり いふ新な問題が出て來たりして、 して、そこにその特殊性の究明と ると我國の圏谷が、例外に近い型 圏谷の型の研究は非常に興味があ 殊に海外の、それとの比較を試

い事であると云はればならない。

あり、 あるといふ所に導かれたのだつた ものであり、 自體が我々に勇氣をつけてくれる のより所である。山の危険はそれ 14 我々の感覺に訴へるものと同じて 眞の姿や、高い頂の美しい姿が」 かなでられる生命の和紘と同じで のいぶきこそ最も人間的な生 それこそ「太古よりの山の 公平さと、 自らを知

先づ人生な正當に愛すべきな数へ 加之、それは死を目前に示しつゝ 人生の正しい生き方といふものも ることを数へてくれるものである あるものの前には死の蓋然性す らせてくれるのだ。その様に質

である。 本アルプ スと氷期の氷河」 1= 明か

新なる問題であらう。此の様にし 質への疑念と、 説明し得ざる高所に發見される事 河遺跡が氷河涵養區の概念からは 生じて來たのは自然である。 相半せしめるのや、様々な立場が を從とするのや、その反對や兩々 であつて、そこに、氷な主とし雪 はないかとの考へも起つて來たの でなく雲蝕(ニベーション)が主で ふ處から氷蝕(グレシエーション) 條痕は餘りに輕微で、妖しいとい 卷 に加へて、 谷の型が正規的でないといふの 日本で發見される氷河 雪蝕との關係等も 又水 での私の恩師である。 1;

領 域にあると云へる。

から既に第一線の氷河學者であり た故大關久五郎先生は、その時代 私が中學時代、地理の先生であつ 級生たる我々が先生の家な訪問し 者と矛を交へてなられた。中學下 氷河肯定者として、 上げられた故山崎直方博士は東大 を子供とも思はす、ドイツ語を**交** ンドケーキなどを進められ、相手 た時でも、先生は、洋行歸りらし へつゝ眞劍に自說を說きまくられ 我國で最初に氷河問題を取り 當時は未だ珍らしかつたバウ 先輩の否定論

來た。 に觸れられた窓師教授の故加藤鐵 ぶ恩師である。上高地の氷河遺跡 太郎先生も私の東大以來現今に及 などについて種々お世話になつて 我國地形等の先驅たる辻村

圏谷を共に現地で語る機會を持 雄博士とは臺灣の山の氷河な、 氷河學者として知られた、今村學 中學の同高として本誌を通じても 大の佐々保雄教授とは冠帽峯の 北山俊雄雨君があり、鹿野忠 又

後此の方面へも氷河問題は進んで

ゐる譯ではないのであるから、 面の研究も、決して解決がついて

今

方、

私が假りに氣候派と呼んだ一

要性も益々加はるであちう。

又一

之助氏は中學の先輩であった。

は勿論であり。

今後雪蝕研究の重

氷河論と極小氷河論とに分れる事

併し小氷河論と云つても、小

の微細な物件に及んで來た様であ

形的な問題は、

その狭い地域内

氷河論は結局小氷河論となり

小川琢治博士にも氷河遺跡の鑑定

の三つの文章と密接な關係にある

**尚ほ、本記事は、最近私の書い** 

た左

大氷河論の

0 小島烏水氏の氷河論は小學六年生 時に設み、中學生の軟い頭に烙 0 如き印象を與へたヘット

「生蕃地探險談」(臺灣山岳第八號

したものである。ツォウ族は陳有

阿里山

恐らくツォウ族 としてゐるが、

(阿里山蕃)に開

飲食物、

記事内容から見て 服裝其他風俗

[昭和十一年六月])によると『本年

(治二十九年—著筆註)三四

月に

界隈が中心地であ 隣溪流域にも棲息する

と私は信じてゐる。

此の意味に

て氷河問題は未だ山岳研究家の

III

家の協力によって、

氷河遺跡の まだく

併し現段階に於ては、 行くであらう。

登

出來さうな當ては少しもないなが はあつても、忘れ去る様な事はあ 5 云へる。此から先、大した仕事の か身を以つて體験した處もあると ゐるが故に、氷河論の歴史には聊 な惠まれた環境と交友とを持つて に他ならないのであるが、此の様 なく、山への趣味を通じての傾倒 私は氷河題に就いては専門家では 博士が名譽教授であるハイデルベ 石名 るまいと思つてゐる。 ルヒの大學でお目にかゝつてゐる -博士には、遊學中ゆくりなくも 時に此の問題から遠ざかる事 アルフレッド・ ヘッ トナ

沼

鐵

太 郎

事を附記して置く。 「日本アルプスと氷期の氷河」 を讚む

(帝國大學新聞昭和十六年三月十 七日號)

鎗、穂高連峯の氷蝕地形に就 5

(登山とスキー昭和十六年八月號) 三 地理學評論昭和十六年八月號 映画「日本の氷河」に就いて

登 加 年 譜資料 管見

關係者の一人として資料心蒐集檢 纂を本腰で始める事になったが、 個人的に隋しない本會事業の完成 批判な仰ぎたいと思ふ。斯くして 今後本稿で示して同好諸氏の教示 討しついある際、 を期待するのである。 一蹟や未だ世に廣く知られないで つてゐる登山史實や文献などな 本會では愈々日本登山年譜の 色々疑問のあ 編 3

ならないやうである。 號(昭和十四年十一月)六一七頁 三十六年一號(昭和十六年九月)) に書いた事は多少訂正しなけ た文獻な見直すと山岳三十四年二 るが、長野中尉の事蹟が記載され に加筆し得なかった事は遺憾であ 即ち右の文獻の一、長野義虎述 拙落「臺灣登山小史補遺」、山 ○長野中尉の新高山 れば 福

> は滿面雪を戴て……八合目からは 山で恰好私の参りましたのは二月 と、『此高山は玉山或は土人は八七月)三五一一三五八頁)を見る 誌第八集九十一卷(明治二十九年 灣島生蕃地西蕃の探檢」|地學雜 中尉自ら講演したものゝ記事へ一臺 ば高連山地の記録として探る必要 社を巡つてゐる。 九月初登頂の前に阿里山界隈の蕃 まして……云々』とあって、 阿里山附近の二十七社生 側 響であつて私は玉山の手前の直き 下旬頃でありました其時分に此山 通關山とも云つて一番抽でた高いスカン 六日東京地學協會例會に於て長野 も無いが、明治二十九年五月二十 ります』(三五三頁)と記してあ りませめでしたが、此玉山附近と 14 計三十五度より四十度の寒さであ して生蕃人も其處には住で居らな 云ふものは非常な大深林でありま 私の露管せし處は夜中華氏寒暖 即ち玉山の西方諸蒂) は雪が積て居て登られぬから登 に露營を致しましたさうして玉 なほ講演記事に西蕃(モリソ 之丈の事蹟なら 番界を視 同

見に疑論を挿む様で恐縮であるが

に住む人々の實見や三浦氏の御意

# 

72 1= 生

以下に之に類する山での

報告だと思つた。 ある」といふのであってい の鶏の聲を聞く事があるとの事で 三浦氏の文で「富士の頂上で山麓 様なことが目に止つた。氣象盛の 五月號の「山小舎」の 山麓とあるから 中で次の 面白い

だした」と云ふ。さういへば自分 んでゐると、 白い磧にほつと重荷をおろして休 惡い高廻りに散々手古摺つた揚句 川へ入つた時のことであつたが、 たのは十二年前に友人と鹿島の大 角一種の錯覺である)として認め であるかどうかは疑はしい。兎に 説明する理由からこの言葉が妥當 私が初めてこれを幻聴へ後で つ自分の經驗から記してみる 「彼が鷄の聲が聞え

ない様になつたが、のみならずこ には、また始つた、位にしか思は も經驗もし、<br />
最近病床に<br />
臥す前頃 の後も山へ行く度に、私自身幾度 だらう」抔と笑ひ飛ばしたが、そ **ネ里にうろついてゐる平家の** 絕對にいへない。その時は「カク ふし、里からの肉聲とはその場合 開えてゐる。聞える時がお互に違 ふ暢な摩が頻に耳の中で判然りと にも先刻からコーケコツコーとい 問題で色々な人に尋れてみたが 幽靈 ない。 " める爲か、或ひは氛壓の變化や、 通が悪い爲に、

して何の様なものであらうか。成 解釋を與へてなられるが、之は果 究して見ると面白い」と暗示的な 氣象的現象に依る事と思ふが、研

件が都合の良い時には、常識で

大氣密度や其他の音響の傳播 同文中の氏の論説にもある通 あらう。

同氏は之に就いて

「之は

でないに決つてゐるし、

又その壁

ら鶏鳴の中で一番顯著な刻の聲で

には附近の室堂等で飼つてゐる鷄

50 0 一番多い。殆んど大抵が左様で 短いもの、鶯のホーホケキョ 犬のワン の種類は先づコーケコツコー 其他コケコツコーと最初の 狼の遠吠えに

來この山で耳にする鷄鳴といふ奴

て説明することは躊躇したいる

曲

てこの場合、

直ちにそれを常嵌め

おありであらうと思ふ。

者の中にも同様な經驗のある方が

當ダーダが集まつた。恐らく讀

一一一多といふ生理的な變化の爲に、

脈動の周期的な波動が聴器に一

實であるけれども、左様かといつ な存在として認められることは事 昔なら神業とでもいふ様な神秘的 は想像もつかない程遠方の音が、

は却々の曲者であつて、

富士山

H

て少し卑見を述べてみたい。 幻聴に就 550 似た路 の勝太郎が耳に響いて來る様な人 はつて來ると、リストものやハー かどうかは別として、若し誰かへ もので、夫を眞面目にとつていゝ トベンのクロイツエル・ソナタの 擬音での想像だらう)中にはベー があるなら、 之抔は同じ幻聴でも傑作に屬する 節が聞えると云つた人もゐる。 へ之はラヂオか 無や樂しいことであ ۲ 1 + 1 0

でいふ幻聴とはどんな理由で起る 寧ろこんな報告はないのから知れ した説明はつけてゐない様である かた、實は耳鼻科の方面でも判然 カーで昇降すれば直ぐ認められる 差異が生じる場合へ之はケーブル るオイスタヒー氏管内の空氣の流 腔の奥から鼓膜の内側へ通じて カサックで肩や頸部の血管を締 にも聞えることであるが、今茲 先の犬のワン~~に似た摩は 漠然と考へた所では、リュ 鼓膜内外の氣壓に

> は今の處保留して置きたい。 も想像されないではないが、 からうか。其のコース及び露營地 出發したものと見てよいのではな 初の新高山進撃は阿里山蕃地から 事と照し合せて見て、長野中尉最 臺灣山岳第八號にあらばれた記 臆測

あり、 ら初登頂してゐるのである。 後第一及第二回共長野中尉の 結局新高山初期の探險は、 ○邦人の豪灣高連山地 其の第二回には八通關側 行で 領臺 か

第一の記錄者たる事は動かない。 關しては久留鳥氏等が依然として 但し臺灣脊梁山脈横斷といふ事に 探り上げる事によって訂正をする 中尉の第一回新高山進撃の事蹟を 山脈横斷を邦人の臺灣高連山地に 年七月久留島武彦氏等の南部中央 於ける第一の記錄としたが、長野 臺灣登山小史」には明治二十九 ○阿里山森林の發見 に於ける第一の記錄

はれる悪口にも立派な科學的な根 子は山登りにのぼせてゐる」とい 與へるのではなからうかと思ばれ 種の韻律的な音波としての刺戟を 頭蓋骨中に鬱血狀態が起つて、そ かうなると家の者から「あの であつて、其の功は河合林學博士 **發見したのは、明治三十六年の事** し産業的見地から阿里山森林を再 科學者群の眼にとまつてゐた。然 山地旅行者、本多林學博士等自然 山の大森林は、夙に、 今なほ林産資源として顕著な阿里 阿里山の事が書かれてあるが、 歸せられるものであらう(地學 臺灣登山小史二一五頁に始めて 長野中尉等 當

> 年 雜誌十五輯一七八卷 十月)七八九頁)。 明 治三十六

○新高山舊名の

には少くとも二説がある。 就ては餘り穿鑒されてゐな けられてゐた事は誰でも知る所で 天皇により新高山の御命名な賜つ た新日本第一の高山舊名はモリソ るが、モリソンなる名の由來に 山といひ、 一はモリソンとは英國商船アレ 明 治三十年六月二十八日 モリソンに就て 領臺前西洋人に名付 明 之

六年二月〕一三九頁)。 雜誌第十五輯一七〇卷 と北太平洋問題」中の一節―地學 氏東京地學協會例會講演「南鳥島 三十六年一月九日農學士志賀重昂 名な附けたいふのである。 の名譽を藉りて山にモリソ であるといふ(竹内貞藏著「臺灣」 た有名な學者ロバート・モリソン (昭和二年十一月改訂版)一一頁)。 **む跋渉した英國領事スキンホー氏** も一つの説は清域に在住してゐ (明治三十 山

○太高山探險企畫 マツケイ氏の事

住した人であったが、 臺灣本島人婦人と婚して同地に常 三三頁に書いたマツケイ博士は、 臺灣登山小史補」二三二 — 二 明治二十八

命名したのは一八五七年以來臺灣 キサンダー號の船長の名で、

出に

日の一般登山界の情勢を眺めての 據があらうといふものである。 あらうか。 筆者の徒らな老婆心に過ぎないで るかも知れないと考へるのは、今 べき事態に陷る様なことが起り得 正路を誤つたりし結果、更に悲む したが爲に、路を無暗に急いだり におかれてゐる場合に、若し之等 えた谷筋や尾根で、相當惡い情況 とすると、之等の人達が人跡の絶 か様な鶏鳴其他の幻聴を聞くもの 錯覺な一種の敷ひの報せと誤認 閑話休題。相當多數の登山者が

質であればその含有率は別として 述べられたのである。この話が真 1 象の前書として含鐵岩石の存在を その後に續く山頂に於ける放電現 雷』に書かれてゐることであつて 石を置いても本當の位置を示さな 含んでゐる。それだから頂上で磁 富 士の頂の岩石は相當鐵 分 之は前號に冠氏の』 富士の

文句が頭に浮んだのである。 と思はれる箇所を紹介させて戴く 必要

落雷によつて磁化される

天

鉄

さの磁場が落雷によって出來てゐ であスが、それでも携帯用のコン 岩石は銅鐵などと較べれば、比較 ることがあるさうである」(岩波新 バスの針を反對向きに廻す位の强 にならい位少量の磁気が残るだけ 熔岩及び玄武岩である。これ等の の中で、一番普通なのは火山の 館』より)

否定する譯にもゆくまいけれども かも知れないし、又斯様な火山性 とであらう。 といふことは考慮にいれるべきこ この場合は慥にこの火山岩の磁性 インスチチュートで行はれてゐる 士山の岩石分柝位はもう何處かの ら飛び出した鉱鍍の存在よ强ち 山であってみれば、地球の核心 尤も寡聞私のことであるから富

度のものかといふことは、 石の磁場としての持續性がどの程 石の狂った例を耳にする事實は、 伯耆大山の鳥ヶ山等、 又富士山以外に、前穂高の頂上や しない丈に興味深いことであ る丈の價値のあることではなから 登山家の立場としても研究してみ **尚この落雷によって得られる岩** 度々この磁 判然り 30

慌て、資源開發會社を動かしたり 慶賀の至極であるけれども、

三七七六、三米の爨頂な幾米かぶ つ欠いたりして貰つては困る。何

かといふに、この最初の一行に

同時に次の一章の

る一證左として、

全く邦家の為に

茲で

てゐない鐵物資源の豐富さな物語 吾國の未だ充分に開發し盡くされ

> 題名をこの雑文に附けることは世 下さればならないクロスワードパ 就いての二つの文章を前にして、 とも意味するのであらうか、とも る心」とは、正しくはその様なこ 近頃の流行り言葉である「科學す ズルであることに間違ひはない。 象とは尚も凡ゆる方面から吟味を たものであるにしても、 夫等の筆者の見解が全く正鴻を得 **妮たるものがある。たべ富士山に** 富士 一題』斯様な浮世繪風な 自然の現

ij 0) 0) たとつた次第、不悪。 大きいことを想つて敢えて、 權威である。說かれる所の影響 れ、富士山頂における鶏鳴と磁 その筆者や質見者は夫々一方 場所は一般登山のメツカであ

午後正六時開會 十一月二十九日(王) 講 演と映画 の 館

す。 會員席は二階です。 來會を御待ち致しま 岳友誘ひ合せ多數御

> 豫定よりも數日おくれた為地元の が大覇尖山から次高山迄縱走し、

察常局では捜索隊迄出したが、

蕃人と別れた一行は無事パツトア ノーミンを經て大甲溪道路に出て

難を逃れた。

眞相は未だ知るた

に從事する傍ら自然科學的觀察及 (明治二十九年二月) 一一一頁)。 である。 水に赴いた某學士を驚かしたやう 献身してゐて、 び動植物岩石織物化石等の蒐集に び一男二女を擧げて宣教師の本職 九年の頃は既に在臺二十年餘に及 ○昭和十六年夏季臺 (地學雜誌第八輯八六卷 領臺後早々渡航淡

雏 南湖大山西側(木田氏の紀行は近 年の交、臺灣山岳會の木田文治氏 山地への遠征で、昭和十五年十六 い。其の一は松本高校の臺灣北部 注意すべき記録を得た事は喜ばし であったが、遠征登山中に二三の り思はざる沈滯を來したかの如く 行が文化史的に始めて探査した 今夏は時局柄學生登山界異變あ 灣高連山地の記録

11 學 Ut 臺灣山岳會等な心配させたのでな の豫定變更で地元を騒がせ總督府 得 れば幸ひである。 ないが、 ○濟州島漢羅山の 若し自由主義的舊體制 初登記

明治三十八年七月から九月に渡り 史的初登記録者は如何といふに、 山に就ては「漢羅山は多少圓錐形 二十八年佐藤潤象氏がある、但 譯の從者金龍水と共に登頂した市 調査を續けてゐる間九月十三日 して動物(哺乳類及昆蟲)の採集 米人アンダーソン氏と共に濟州島 (地學雜誌第八年八八卷(明治二十 つたとは判然記録されてゐない。 殆ど攀ち登り難し」とある火で登 の山にして頂上は僦岩累々として して濟州島に渡つた者は旣に明治 河三喜氏ではなからうか。邦人に 九年三月) 六七一七六頁、 滯在し山中にキャンプして主と 知らない、然るに漠羅山の文化 山岳班が入つたと聞くが、詳細 號(同五月)一二五—一三五頁に 一〇頁、同第六年三一號明治三 朝鮮濱州島の漢羅山へ今夏某大

五年三〇號(明治三十九年一月)一 九年四月)二二二頁。博物之友第 「載の市河三喜「濟州島紀行」)

録を樂しむ事が出來るであらう。 るから遠からずして其の秘境登堡 田氏に連報及び報告を依頼してあ 成した。リーダー渡邊氏及隊員春 等の大きなヴァリエーションを完 南湖溪源流、中央尖山北西の岩谷 く山岳に登載の豫定)を精査し、

第二は右と同じ頃大阪商大の組

る」林間の急崖は、

歩々に辷りて

に富んでゐると思はれ

振舞を受けた。 此地の舊家佐伯氏に依つて朝飯の 部落まで歩いて、 縣營鐵道に依りて終點千垣で下り 分に富山驛着、 糸魚川驛で拜んだ。午前六時五十 くる廿六日の日の出な越後の國の 常願寺川の流れを右に見て行くこ は彼是十時過ぎでもあつたらう。 車で、上野豚を發った一行は、 千垣驛から約半里な蘆塀寺の 藤橋に出て、更に途を稱 佐伯氏を辭したの 更に南富山驛から 立山神社に賽し 明

夕立の山を過ぎ行く溪向

N

法 してゐる。泥濘の路を急いで、 **焰と成りて將に日本海に落ちんと** けさ糸魚川で迎へた太陽は、西の 角に登りついた時は既に七時、 小屋に着く。 弘

七月廿五日午後六時五十分の

列

| 攀頗る観んだ。漸く彌陀ケ原の

夜の山は夢のようにあり稻 夏給一つ蓆の旅寢同士 二千尺な一気にのほる茂り 山の上に山ある空を瀧見哉 空翠や麓の方は雷の 上り路神鳴る上の小雨かな 妻す かな

くり」ケ池の雪筏を俯瞰しながら

午後五時、室堂の立山氣象觀測所

に鍬崎山や赤牛岳、 りとなり、 老鶯の摩も亦甚だ若い。弘法の小 と、杜宇が美しい摩で啼いてゐる 七月廿七日朝、眼が覺め窓を排く を立ち出でたのが七時、道は上 左に大日連峯、右手遜 薬師岳などの

島

中

潭 竹

☆山登山立

草山の徑 **る** に、立山風は徐に早凉を送って來 雄姿を眺めながら彌陀ケ原を行く に山裾のどこやら閑古鳥が啼いて ケ鼻の奇勝な經て、鏡石に出づる 大師の遺跡として傳へらるゝ獅々 谷へ降り、殘害の姿を越へ、弘法 追分小屋から左へ敷道な一ノ

名川の

右岸に取って、

の高さ、殆んど垂直に近いと思は 亦甚だ妙である。午後六時、 段になって落下してゐる。その勢 止んで、午後五時には瀧見平の小 屋で暫し雨を凌いでゐたが、幸に る頃から小雨と成り、雑殻谷の小 辿る。七姫平といふ開懇地を過ぐ 稱名瀧は高さ千三百五十尺、四 への登りにかゝる。千五百尺 岩壁の變化も 關陀 するあるなど、 此あたり一帶、草地の間に佩石の の下手の所に想ふて中食をとる。 あて、境更に階級を添ふ。<br />
石小屋 にか迎し、 處々に偃松の叢の點綴 如何にも高原の

如何にも豪快で、

ふ。午後は四山に雲立ち罩めて、 驗と、一同裸身と成つて、噴湯の 行く手の立山本峯も浄土山も良く れてゐる路に依つて地獄谷に向 流れに一浴した後、丘を上り、「み 凄愴たる燒爛の谷のさま、 ふは成程生地獄の名有る位で、 視ることが出來ない。地獄谷とい も其の名に背かず、一行は何も經 稱名川支流の崖に沿ふて拓か 行はこれより立山本道 赫々たる噴湯、その 如何に 心餘處 濛 を了り下山した。

色を深うする。 乙女嶽と思ふあたり、空は眞一文 犇々身に泌む。西の方大日嶽、早 を壓して來らんばかり、夕冷えは 本端は雪溪を隔てゝ、幾んど頭上 海拔二四五五米突の高さで、立山 字に斜曛を帯びて、一入高山の暮 此處に宿りな求めた。室堂は

時鳥一聲いづこ雲の 夏泊り我も布子の丸緩かな ゆくりなく夏山宿の初火鉢 時鳥有明空に月残 夏の夜の空にあらばの雪の 夏山の雪を紅葉に入日かな 日の曇り雄山は見えす閑古鳥 聲の若さ老鶯と思 よりの風は秋なり夏日暮

七月二十八日、 朝の空工合の思は

> に通じて、絶巓の雄山神社には天 復かトせしめた。乃ち遽に身仕度 午前十時頃に到り、 居とあきらめながら兎角する中に の手力雄の命と伊弉諾尊とな記 五の越まで、 の頂上へと向ふ。路は一の越より を整へて發足、雪溪を渡つて雄山 タ切れと成つて、十分に天氣の回 る。祠前の玉石に跪いて一同禮拜 からざるに、 巉岩の群り立てる間 けふ一日は先づ蟄 雲は灰第に下

折立、 の威容を見ることを得て、 ならず、それでも大汝峯、富士ノ 雲に遠くな遮ぎられて展望が十分 れてゐるが、此の日は生憎朝來の に数へらるゝ名山で、七十二条 山々頭の眺めは頗る雄大とせら 稱せらる」ほどの支挙が有り、 立山は標高一萬尺、日本三山の 別山に續き、 東方遙に劔岳 滿足し

鬼ヶ岳の下りは實に峭壁萬仭、 りて更に尾根傳ひに鬼ケ岳に上 土山の鞍部に出て、 一ノ越より右に山路を上り、

だり得たと思ふと此度は獅子ヶ岳 回すへからず、最も危さ處は一同 歩右に身の重心を失ふときはまた の上りにかるる。 ロープに依りて下だる。僅かに下 西面の崖を繞り、南に龍王岳を降 Mj して既に午後五時 此日時間の餘裕 左して龍王岳

りついた頃、白雨到る。更に一つ 配を爲してゐるので、小石が脚下 てゐるのを見た。之を過ぎると、 斜で、御山谷に向つてなだれ落ち 岳の頂上、一雪溪がかなりの急傾 近 雨、小屋も小搖るぎして、疲 小屋に宿る。夜半一としきり大雷 丘を越えて五色ケ原に出て、五色 から谷を目掛けて轉つて行くさま 松の間を通じ、 懸崖絶壁で、 なる。矢張右手は谷底も知られぬ また南に向つて九天奈落の下りに た旅緩の夢な驚かされ 10 漸くにして「ザラー峠まで降 餘り氣持が良くない。午後七 乃ち奮發して上る。 徹石の徑は少かに 路面が軟かく急勾

鳴神や真夜中月に雲かるる **残雪の山のまぶしく夏日** 鷲の栖む高根の松に夏嵐 雪を來る風に裸を吹かれ 夏嵐醒めくとする雪の 暑き中の雪解風や偃小松 久しくも思ひし山に夏この ある 75 H

淨

夫の鎌ん 時に小屋を立ち出てく、 來の雨雲未だ全く散じ盡ざれども 7 を刈安峠に向ふ。雪溪に雷鳥の女 空模様は悪しからず、 を獲たといふ。七月二十九日、 高山植物の絢爛な以て其の名 色ヶ原は二千五百米突の高原 一羽伴ふたるが、 乃ち午前七 五色ヶ原 夜

が眺められる」。片羽の六尺もあ ケ原 らうといふ大鷲が悠揚と其のあた 近くは木挽山や雲ノ平などの翠黛 る。雲は次第に減じて、明日は越ゆ らしと「カメラ」に収めた。 の上を彼方に逃げて行くのを、 姿を見ると、 き針の木峠を初め裏立山の山々 水が潺々として音か立 偃小松の茂る邊りには、雪解 の花野は朝露を含んで美し 覺束ない足どりで て」る 五. 珍 雪 30 枯腸を翳した。 樹は灰第に高く、 て來る。 餉 に蓆を敷いて、 つた所に、

峠の上に出づる。大きな槍樹の下 や暫らくの間之を過ぎて、 イ」谷と中ノ谷との鞍部を爲せる 白樺などの矮生する森林道で、 刈安峠への下りは、白松、 「ヌク 唐松 稍

な舞ふてゐた。

率の雄姿を仰ぎながら、 北方に近く立 悠々と午 Щ 本 夏 会会や

其の派出所に泊めて貰ふことにな たとる。段々と下るに隨ふて、 晩飯には岩魚の鹽焼や刺身に 一行は日本電力會社の好意で 遂に黑部の溪谷に降り切 平ノ小屋と いふが 有 溪岸が頓に聞え あって、之な渡って針の木峠の登 今は甚だ粗末な釣橋が架せられて 僻したのが朝の六時、 晴である。 しに依つて對岸に移ったものが、 いふて、こゝ黑部川の上流な籠渡 七月三十日、 H

登るほどいよゝ夏花美しき 崖千仭鷲の羽風の女郎花 夏霞明日は越ゆべき雪の峰 夏野來て深山は秋の花盛り よべ雨の名残やいつこ夏嵐 短夜や崖落水の雪名 一高く雪解原は花野かな 澤の合流點に出ると、 澤の谷筋に沿ふて上る。軈て大南 ラサラ」越といふもので、先づ南

落葉松や白

Ш

、思は 83 空の 雪 の

々成政が密かに信州に越えた「サ 口に向ふのである。この道は佐 往時は「平の籠渡」と 本電力の小屋 珍らしい好 られた。 7

谿間の流れは幾度か互巖大石に堰 樺の大森林はいよく、濃密を加へ れて、鞺鞳として響を作してゐ

の大深山 つけた古い監視路を踏むやうにな 帶に出た。此處から帝室林野局が 鳥の摩一つせず原始其のまゝ は物凄いばかりの静寂さ

た蘇苔は絨毯の上な歩むかの 朶や其の他變つた植物が多々ある 來なかつた。一面に敷き詰めら と一頭の羚羊も鹿も見ることが出 到る所に脱糞は見へるが、 此のあたりは羚羊や鹿の棲息地 大小いろとりんへの革類、 生 菌 P te 憎

陸測五萬分一圖には未た此の踏

破して聖の嶺頂を極め、再び百間

國境尾根に出て中盛山、

兎線を踏

最近拓かれた百間洞山ノ小屋から

つたのは本年八月の中旬、三伏峠

7:

深奥北又澤の秘谷に這入

三田尾松太郎

の北又澤

より荒川、

赤石、百間平な通り、

同様である。 白檜帶かしばらく過ぎると唐

見せてゐる。 此附近は、千古其のまへの様相を 倒る」にまかせ、一指も觸れざる 30 檜、 年古りた是等の喬木は自然に 梅 姫小松などの 混林にな

の尾根の末端にある深ケ澤と、大 九〇一米の線を通した尾根で、 山から流るゝ大澤との間に在る一 澤嶽より流下する深ケ澤と、中盛 路は載つてゐないが、 澤が合流する地點が大澤渡にな 要するに大 此

緩やかに、

氣分の良い白檜の幽林

する磊々たる岩塊の恶場を踏むこ

ようだが、

頓んと此の方面に智識

頂上左肩の富士見豪から左折ガレ 洞に戻りて一泊の上、翌日中澤嶽

次いで這松岳樺の繁茂

と約三四十分にして、俄然踏路は

を有ちあはせてゐない筆者には、

るで小判を見せ附けられた猫

7

ねる。

など、幾んど手に取るように眺め 指願し、 遙に飛驒方面に槍、 に近く山の傾斜は次第に急に、南 を掬ふに、正に氷よりも冷い。 居る所がある。手を入れて落清水 ゐる岨道を上り行くに、紫丁塲と ヤマハンノキなどの生ひ茂つて 澤の岩石が多く紫色を呈して 漸くにして路は谷筋 近くは鳥帽子嶽、 穂高の連山を を離 赤牛岳 12 峠

れた ij 7 連峰は幾んど呼べば應へんばか 極むることを得て少憇した。左に 爲してゐる。午後二時、 「スパリ」岳や赤澤岳、 、蓮華岳と針ノ木岳との鞍部を針の木峠は海拔二五 四一 米 突 遠近の眺望は流石とうなづか 到頭峠を 裏立山の

ぎて大澤小屋に着いたのは彼是夕 を慰む。 拔き酒な温めて、 模ながら相當設備も有り、麥酒を の六時で里に近い此の小屋は小規 の業とて道抄が行かず、<br />
雪溪を過 て急峻な雪の勾配を辿るに、慣れ かゝる。一同「カンジキ」を穿い これよりいよく、大雪溪の下に 山行連日の 勞れ

倒れ木の大木を橋に夏川瀬 蜻蛉の羽音も山の静かな 夏草の文けより高く旱路 旅單衣黑部の水に朝手水 このあたり熊出るといふ清水がな

> 夏凉し剛炉裏に洒かあたゝむる 雪踏みて歩くら夏の一日かな 崖路を行くに雪間の夏の花 夏 霧飛驒を眺めの雪 H

擧げ、 的を達したに對して、 づ豫定の計畫通りに立山登山の 車を傭ふて松本市に近い淺間温泉 此處で盡く强力を放ち、 分明一幅光琳抱一の活畫である。 休み、澁茶、サイダーなどか出さ に到り、 大出の部落に着いて時既に正 揃ふてゐる佳麗な花野に出でた。 女郎花、擬寶珠、撫子などの咲き 面白い。白澤といふあたり、桔梗 れて、初めて里心地がついたのも 念の寫真なとつた。畠山の小屋で 拓かれ、其後に改修を行つたとか 澤落口の所で强力を加へて一行記 をあとにして<br />
徳川右岸の<br />
林道につ いて下る。大正三年頃に此の林が 七月三十一日朝七時、 頗る良い道に成つてゐる。扇 午後十時五分、 目の湯といふに投す。 松本發の夜 互に祝盃を 大澤· 一行自動 先 目

草いきれの中に凉しき桔梗かな 山 路幾日はじめて青田見たりけり

行で歸京の途に就いた。

×

×

×

×

十一時 稱する所があり、 る山毛欅の喬木が現はれ、 た境地でもある。 幽林であり、 南ア特有の頗る良い感じを與へる 間半の長きに亙る尾根通しは、 ら登ると林相は一變して亭々た 大澤渡の合流點に達したのが れて鬱蒼たる濶葉樹林帶にな 通しの略ぼ中程に唐松 白檜帶に入ってから四 また興趣に富む優れ 此處から更に時 針葉樹 峠と

岸に沿うて二三十分もすると左岸 たらう。 女魚、鮨を混ぜて二貫目餘もあつ 人の釣師に遇ひ、魚鑑な見ると山 小屋な發つてから始めて此處で一 を取つて行くと峡底に出た。 方は林野局山小屋への通路、 に移る。 是から北又澤の秘谷降りだ。 中に一丈四五寸、 間もなく路は分岐し、 目方に 荒川 右方 法 右

び右岸に移る。盆々窄まれて來る 被ひて豊尚ほ暗く、恰も函中に在 峽岸は斷崖屏壁、 を以てした踏路は、<br />
三時間あまり るかの如くだ。棧道に次ぐに棧道 緊張な緩めさして臭れない。御池 から落ちるコスマ澤で漸つと棧 峽中大巨岩の聳ゆる神ノ石で再 原生林は全峡な 泊する。此の地は北又渡から西澤 た結果、下栗部落の井戸端屋で一 經て聖登山の根據地になって

ある。 林用軌道な敷設する計畫で、 入ることを許さなかつだ此の難谷 測量のため踏路を附けたものらし に經過しだのは全く棧道のお蔭で とも別 開されて來た。 一度の渡渉もせず、 第二期工事として大澤渡まで 此の點林野局に對し深甚の 11 下方遠山方面が少し 從來容易に踏み 案外容易 之が

下に北又渡が見えて來る。 源とする西澤(本谷とも云ふ)が 山者には非常に便宜になるであら しいが、運轉開始となれば、聖登 工事の竣工を見るは來夏になるら の靜寂を破つてゐる。此の第一期 工事の最中で、簽破の爆音が深山 西又渡へ出る第一期林用軌道敷設 山川となる。對岸には遠山口から 北又澤と合流し、是から下方が遠 コスマ澤を過ぎると軈て左方脚 聖を水

御池山の中腹を捲き、 此の日上町まで出る豫定であつた から實に十四時間の强行である。 のは午後の八時、 が、以外の長途で少からず疲勞し 部落大野な經て下栗部落に着いた 北又渡で遠山川とも離れ、 百間洞山ノ小屋 遠山の最奥 右方

かれ

して五六百目もある大鰐がゐた。

30

10

右三路の中比較的近くもある

海道然別湖で限にした以來二度目 斯んな太い奴を見たのは、先年北

北又の深谷が成る程とうなづ

祕林、 類例が少くない。 た淨谷、 澤嶽下方白檜帶に入ってから大澤 たが又非常に愉快でもあった。 渡に出る間は、文字通り千古の大 今日は相當難儀なコースであ 北又澤は是亦山神の祕され 是ほどの祕林祕谷は他に た

が點ぜられんか、全山全谷な錦裝 巻が展べられるであらう。 紅なり」と云ふ、絢爛豪華な大繪 せしめ「霜葉は春三月の花よりも 此 の深奥の美林に秋ひとたび火

下栗部落から下方へ出るには三

謝意を表したい。

て遠山口へ、上町から小川路峠を て小澁川の大河原へ、(落合から 越して越久保へ出るもの(越久保 路がある。即ち木澤より和田を經 パスで伊那大島驛へ出る)何れも より程野部落な通り地蔵峠な越し より飯田へバスが連絡する、上町 道程七八里で現在乗物は 全 然 75

峽上 驛へ出るが一番興味深いやうであ 峡の風光な賞しつゝ、中央線辰野 遠山口より乘車し、車窓より天龍 尚今回の 聖登攀についての詳 た一讀されたい。 (二六〇一年十月廿 近く優行する拙著 二日 「幽山祕 記)

(

もつとよいところが分るだらうと

もつた

入り、辨天岩、西澤波、

聖平を

# 上高地より 福田嘉四 郎

着いた。 が叶つて飛驒の高山へ行くことが は入らずもがなの俗惡文化が浸入 居城であつた高山の町は、 ら連想される佐々成政や、 出來た。然しザラ峠や針ノ木峠か して變なカフェーなどが殊に眼に ら岐阜への高山線が開道してから 八月の末、十何年振りかの思ひ 富山か その

夢 そんな痴人の夢に等しいものには 施かれてゐた。自分の夢は高山は つた。すでに町ではなくて市制が 何の係りもなく高山は變化して行 ここへ來てよかつたとおもつた。 ことだつた。それだけでも自分は 方の家が舊市街にまだ澤山あつた 都に似てそれとはまた異つた建て は、町の中を流れてゐた宮川と、京 不機嫌さな一つ慰めてくれた と告白してゐる。然し裏切られた いつまでも町としておきたかつた そしてなほながく逗留してみたら はさう簡單に變化はしないが、 自分の昔抱いてゐた高山の町の 0

> 行してゐるのなみて、これだけの 乘鞍へは將來バスでも通すのかと 相憎と曇つてゐて乘鞍も笠も見る 六・九粁といふ。 人力を別の方面に持つて行ったら 思はれるやうな道路が大々的に進 とそんなことな考へたの ことが出來なかつた。平湯峠から 山から平湯迄パス、 木炭車であった。 里程は三

今度見せて貰つた。寫眞がある。 は秩父宮様が行かれた同年か翌年 お で隣り合はせた娘が中村屋へ來て ぐに中村屋へ行くと高山からパス 5 玄關から立たうとなさつてかられ とおもふが、その部屋といふのな あて給仕に出て來たのには「<br />
おや 3 や」と驚いた。以前に行ったの つたので、バスを降りてまつす 細池を經て行つて泊つたことが 平湯は昭和の初め一度中尾峠か 行の先頭に立たれてゐるのであ 枚は宮様が山靴を履かれていざ つたのであらう。 た顔でピツケルな小脇に抱へて 所で、一枚は槙さんが例の緊張 一家の光榮これに過ぎずとお 中村屋一家で

安峠房へ出た時のやうな感激は

のまま逍路の左右に捨てられたた 込んで勢よく登つた峠の路もパス ひたして原始林を搔き別けてやつ ちはなく、以前燒岳からいやな思 め昔の庭園の中を歩くやうな気持 を通すために<br />
擴げられ、<br />
盛土がそ 國製のガソリン一罐をバスに注ぎ 平湯 から安房峠までは貴重な米

であった。 激とすこしも變らず憶かしいもの 瞰した平湯の部落の印象は昔の歡 すこしもなかつたし、その道さへ つた。然し峠のバスの窓から俯 までは消えてしまってゐるらし

白 馬 耕

Ш

Ø

名

(N)

山の地名

★蓮華岳「針ノ木」 二七九八•七米 信 濃越中

想せしめる、山顚附近の形である。 た似よりの形貌がある。 ンゲと呼ばれる岳には大體共通し 大町の者はこの山をビャクレン (白蓮華)とも云ふ(山岳)。 蓮花を職

などある。この三俣岳について後

大體において、

此の種

形からの發生と見てよ

例としては白馬岳あり、三俣蓮華

には志村氏のスケッチした蝶の間 いふ。小島氏の「日本アルプス」 濃寶鑑や信府統記にも出てゐると 載せてめる ら名付けられた。このことは信

の怨みも持つてはゐないのであ

が多いための命名であらうか。 魚川街道沿ひの平岩の近くに、

温泉がある。附近に豆料のクズ

この山の南方山麓にあたつて葛

★北葛岳

信濃越中

五五五五

バ葛葉峠がある。これは確かに

變化が來るといふことは考へられ

ために翁と吾々山岳會との氣持に

形で争ふことがあるとしてもその

よしや皇國が英國と何等かの

ので、北葛といつたのであらう。 鞍ともいふ。形からの稱呼であら 葛ノ湯の北にあたつてゐる峯な ズの多いための呼名であ 北葛の頭とも云はれ、一名乘

さうである。

日の暮れ方に早速義

上高地は今年は人が少なかつた

たった。

すかに照らしてゐた。それな見た

た。トワイライトがその温顔なか 六澤のウヰストン翁を拜しに行つ

(燕岩)と呼ばれた(志林氏)。 ふより尾根上の―隆起と見られる この岳は地形上、孤立の峯とい ★燕岳 かつては單にツパクロ 信濃 二七六三•四 イワ 米 成されでしまってゐたのであった が始つてからは翁の像はすでに完 賛成ではなかつたが、今度の事變 の像を残すときいた時は敢へて不 た。質を云ふと私はアルプスに翁 瞬間自分は「よかつた」とおもつ

蝶の形が残雪の間に現はれること この山の肩には、雪か消えるど ★蝶ヶ岳 同上 二六六四・三米 られてゐる國の一人ではあったが である。敵性第三國の第一に擧げ てゐなかつたことを嬉しく思ふの 見た瞬間私の心はホツとしたので だつた。それがいまこの翁の像を が無條件に賛成しきれない気持ち 然し翁個人に對しては吾々は何等 3 山岳會の先輩の考へが誤つ

代の四倍もの宿料なとられて驚い では想像も出來ないほどの豪勢さ 始めてだ。自分でもなんだかおか 提鞄を持つて上高地へ行つたのは 温泉ホテルへ泊つたが、背廣で手 た。然し十疊の部屋へ一人とは昔 しくつて仕方なかつたが登山服時 そして中の湯から上高地へ入り 解らぬ筈がないのである。 のであらうとおもふ。いくら人種 ることと思ふのである。 も個人としては親日家も必らずあ 的事である。 2 違ったとしても日本のよい點が の個人の意志は無視されてゐる 頑迷なる大衆の力によつてそれ 現在の英國人の中に 唯為政者

デムポ火山(上)

Von H. Linger 福井幸男譯

なほもほほ笑んでゐるのである。 らない日暮の徑に立つて岩壁に向 つてゐると、頷くが如く翁の像は そんなことな考へ乍ら誰れも通

再 秋の肌寒い枕元に聴き乍らウキス ŀ 注意を向けたらどうだらうか。 にする人は近い身のまはりより眼 周圍の山そのもののたたづまいは上高地は俗化したといふ。然し をはなしてもつと悠久な山の方へ 少しも變化してゐない。俗化な気 び憶ひ出してゐた。 ンの温額と學生時代の上高地な 私は懐しい梓川のせせらぎな初

南スマトラ

北に發見されるのである。 三八〇〇米あり、其の約一〇〇 ルンチ(或はマリンチ)と呼ばれ 脈中の最高峯はピツク・ホン・ケエ あるとされてゐる。南スマトラの 目の山である。 南部山脈に君臨してゐる。その山 三〇四六米から三二三〇米の間で デムポ火山は、 其の高さは種々で スマトラで二番 粁

形なした様子は非常に良い。 優美な山容ではないが、其の圓 Ш 原の上に聳へてゐる。日本の富士 シア山脈の高山の様に火山であり や、ジャパのスラマツトの様な 西スマトラのバリサン山脈の デムポ火川は總べてのインド

外、島には未だ十九の活火山があ 最高部は削りとられてゐる。この の探檢で、既に一〇九の火山か知 た一八〇二年のインドネシア山脈 る。ユニグ・フンによつてなされ た。その結果は一八八一年の地 ルビークに依つて始めて調査さ れ、一八七六年から、七七年に この地方はオランダ人フ



多数の大農式經營の村が見られ

・アラムの高原に、

0

道を切り

±:

3 1 0

ハト行きの船に乗る。

ラハト

2.

に美しい切斷面である。併し ル・ヂオロゲか一九一二年に企て たのである。 には石油の産地は發見されなか るパーゲル・アラムの附近と、 られてゐる。 エメイ山脈の新しい切斷面の基 究調査にも拘はらず、 其はデムボ山脈を含み、 地圖 の附屬的 パスレル・ペツトロ 50 火山の北東に **FF** 究の中に述 此の火 非常 細密

路上のさる河中の島の上にある奇 道程を堪え忍んでゆくことが必要 で行き、 とされてゐた。今日では主要交通 れてゐるので、 包まれた中央山脈は道から遠く離 ならない點にある。 1: 山の様な困難はないが、又何人も コーバンの様な山ではないのであ る火山灰の嶮しい山腹な通過しな な町であるバレム・パングから、 に、以前は當然長いひどく辛い 密生した沼地を通過しなければ 林があり、 頂上に達し得るブロモやタング 其の困難さは山頂近くまで原 にならないジャバのメラピイ ムポ火山の登山はくづれ落ち 観光道路を利川して容易 先づ第一にアツシュ 此の山に到達する 職火口の近くま 此の原始林に

じがした。

代自 動 車道 路を利用して 到着 出來

した。 た家族の

ちとで

愉快な

H

te

過

度の ムへの旅行に過した。 パレム・パングからパーゲル・ア 備 南 休暇の大部分の日か、 は要しない。手軽に行け スマトラでは、 他の土地の見物や、 登山に大した ラハト 妻と共 叉此 るの

準

の附近 大な美のもとに、 光を持ち、 2 よく、アンコールの遺跡から蒐集 れた佛像を見せて下さった。 遠地に來てゐる博士は愛想 二米以上ある世界の 此

た 其は掘り出されて間もない石 の原始林の中で成長した偉 案内して下さつ 偉

給薬書にある様な感 屋根は美しい藝術的 其はヨーロッバの大 集團家屋であった。 ヨーロツバ人街に のトタンを張つた るものは魅力的な 関的のものであっ 街の様であり、 パズマ高原の中 全く樂しい 之八次河

商店

な 7 上では、 0

旅行は其の高原の

11.

會社の從業員のため 社の經營の旅舍に泊 1: るパタビヤ石油會 其處は以前は

ゐるスイス人 ズンパツ ク 凉しい處である。 大栽培園所屬の病院長 れてゐる。海拔七五〇米あつて 員のために、休暇に際して使用 ったが、今日ではその マラリヤ病保養専用の場所で 翌日 我 倉社の從 ヤは 博 をして 別 0 1:

3 業

> 藝術最盛期の珍らしい遺品であつ 像であつて、 忘れられたかつての 印度洋

親しみのある方法で案内者として であらうか、その博士は他のス 多分其はオストラリヤのモノ ゼル造つたあの藝術に屬する 開くために雇つた六人 べの 如き められた山岳の過去に於てどんな でもあつた。單に疲勞の後の心良 質學の旅行としては貴重なる收獲 る景色に見とれた。 眼下に偉大な鳥敢圖として擴が のあるものである。又平野が秘 景色ではなく、 約千五百米の高度まで來て、 かして 水たかとか、 登山専門の方面 其の眺望は地 0

共に私の知己となった。 意を持つて下さったコー 苦力を指 導する人として私に好 ン氏と

場經營である。パーゲル・アラム 事し、又移動して行くのである。 耕者は、此を利用して、出來る限 られてゐたが、現代では多くの農 の上にあり、 ルンチの北部の様に茶・ミサ に於てはコーピーだけではなくケ 此の方法は保護されたる風土的農 用してゐる。 な山腹にあ デムポ火山の熔岩台地の様な巨大 眺望を與へられた。 てパーゲル・アラムの附近の移 ナ樹等を栽培してゐる。 特別な耕地の耕作法に熱心に從 の經營を見に行って、 翌日の夕方になつてドライブし 以前はこの火田耕作は見棄て 苦力を使用して伐採さしてゐ 原始林の上の新しい境界線ま なほ土地を得るため 高度約二千米まで利 全然不毛な火山礫 其の移住地は 素晴しい 麻

あ で 0 なく、 への畏敬の念を起させるもので 發生は 単に 自然の莊嚴さ、 科學的な知 創造物の 識にかり

にある。 かもしれない。 成の後に、先づ最初に生じたもの 噴火して高くなって行つたのであ ごの高原の後に聳えてゐた。登山 岩流は層になった第三世紀層の 士の略圖の様に火山の凝灰石と熔 11 究された地質學的の緑であり、 には全く困難でない様に思はれ 0 ある突起である。 通稱ペルモ・カ 空一杯に擴がづた雲の灰色の光り ズマ高原と称せらる。 山の山腹に擴がつてゐる高原!パ 消えてゐるのが注意を引いた。 な火山の姿が夕暮近い胤雲の中に 地と私の後に黑く、嶮はしい巨大 3 中に、 ポミルキ石灰である。.その山 第四世紀の岩石で、 中心部と山頂が衝經石で出來て い勾配で傾斜した尨大な火山台 其所から左右には各卅粁宛位の 他の言葉では第三世紀層 の火山はトープレル博士の研 原始林と不毛の火川礁の 其の火山は何回も何 この突起は第三世 トープル 其の火山 の形 [11] 中 博 そ 1: 火 腹 11

叉價 この發生は全く知るの 代りに最初の第一紀にも發見する 紀の終りや次の時代の ついく 火山爆發の 困 難であ

私

紹 몲 書 介

# 日本の山々

塚本閣治作品集1 行所 五と溪谷社四

ツとしないものまで挿んである様

つたたのか寫真集としては餘りパ

ない。それは之から紹介するので くて内容が悪いと私は云ふのでは るのだから仕方がない。紙だけよ 近頃は内容よりはまづ紙が氣にな は「紙」がいゝといふ事であった。 の本を手にしてまづ驚いたの

には之でもいるのかも知れな

概念園の中に撮影場所もその方

照してゐる様な氣がする。矢張り 真集を見てゐると氏の十六粍を觀 向の記してあるのはよい。然し寫

玄以上に見てゐる事も確かであ と頑張つてゐても世間では氏を半 評のある事だし、御本人は素人だ てはズブの素人の私に兎や角いふ 塚本氏の寫真については既に定 從つて寫眞の良さ悪さについ 0 なもののみで組 寫真があるやうであるのは餘り う。だが同時に何處かへ一度出た 狙ひ所に共通點がある爲めであら

心しない。第二輯からは全く新鮮

感

合せて頂きたいも

頃では登山を自分に都合のい

の記録をかうした形で纏めて置け 氏の旅行記録である。登山や旅行 短い乍らスツキリした感想文を入 る氏を私は美しく思ふ。概念圖も 木岳から雲龍峽まで總てぐ十編の どうも前半の方がよく後へ行くに つ氏にしてはじめて出來る仕事で な材料と腕とよさパートナーを持 せて一つの記錄としてゐる。豐富 ふ。それに一つの記録に数葉を組 つてポンヤリして米るのは寫真 それに半玄的寫真數葉を組合 やうとした所に多少無理があ もののみのせいではないと思 寫眞は目次にもあ 然し全體からうける感じは る通り空 がゐる。さうした人にはかうした になつてゐる似而非大(?)登山家 が)には此の種秀れたる山岳寫真 姿がわからないのかも知れない 姿に眼を蔽ふ程の者へ或ひはその 知れない。然し山は永遠である。 寫眞集は反國家的存在になるかも か 0 時の興奮にかられて登山の真の 方面へ無理に結びつけていゝ気

を表したい

原稿難、

資

(紙) 材難、

早速一席

たきょたいとある

に入らうとか山を全然知らない人 な氣がする。尤も之は登山者とし 之から山 聲の員會

の私の感じであつて、

讀み人知らずは一切没にしますか らその心算りで頂きたい。

て或ひは故意に觸れやうともしな 時に登山報國運動の眞の姿に敢え 集の存在理由はわかるまい。と同 大變結構である。批判のない所に 際しての此の種出版物の提供の真 進歩はない。だがその際もそれが んで行きたい。遺難その他の批判 い似而非登山家によ國家非常時に であるものを望みます。 建設的な提案に導かれる如きもの 意味をは悟り得ないのではない と思ふ。 なほ紙上匿名は差支べないが、 かずに、正々堂々と進 な情けない弱音など吐 はしたくない。その様 併しこの段を陳情欄に 関が押しかけてゐる。 役所には毎日陳情 (吉澤記 はない らが當方の言ひ分 限られ方をいふのである か

(編輯者)

手氣儘の批難、合せて三難といへ に至つては一度でもこの道の經験 ば下手な万歳に聞えやうが うといふもの △茲で謂ふ限られ 者にとって忘れられぬ心勞のあら た紙面な然る可く纏めあげる手腕 づは新舊編輯子に衷心感謝と敬意 こむ程手軽い代物でないことない リュックサックの底へ鑑詰を投げ た紙面とは頁数の寡多を指すので △前號の編輯後記に會員の意見 △四頁一枚單位といふ △毎度のことながらの △それ以上に限られ △不束ながら △扨てこれか 會員の勝 △「貴 △到底 △先 で一つ原稿選擇權の强化が机上に 性といへば の人に見たは僻目か△登山家の知 頃の登山家の一タイプをKS氏そ 本當の「山」は知らないと のが新設の「關西支部の頁」 おえら方の顔が拜みたい抔といふ 政治的な機微の有るなしは知らい と思ふが のだ位のことは判つてゐて貰へる いくら野放闘な登山界でも顰蹙も 編輯者の辯明がいるやうでは 上つてもいゝんぢやありませんか 「會員の壁」も現けれて △こゝら 構ふまい △屋上屋を架すの譬え カで一一中継ぎして貰はなくても る」のが目的なら、なにもオーサ △慥か特別依賴の筈の原稿に一一 新なるにあり 苦手だが △廣告の生命は常に嶄 上不爲めかどうか あること △單に「會報に潤ひを持たせ △雪洞技術はマスターしたが △判つてゐて判らない △たまには山岳會の △切手の濫費が國策 △二回三回續けら △經濟理論は Δ

てらつしやるぢやありませんか のものとも野のものとも一切默つ 任ある結末なつけたい」こんなこ は一體ありや何ですかえ の强さとはてんで別問題ですから の强さと雪崩にぶつ壊された雪洞 △茲暫く續いた谷川岳の雪崩問題 △ご尤で、ご尤で 不足な訴へるのも考へもので たとは凡そ誰もが豫期してゐな **ないはなくつちやあならなくな** 知つてゐるか △KS氏の云ひ草なんぞ △肝心の遭難者は海 △第一鼻ッ柱 △無暗に原稿 名突破 でごさんすとサ 買ふ気がなくなる ながの峠哉 なる登山界にインフレ景氣は法度 きな!しせずに、餘白が出來れば れると讀んで見様かと思ふ本でも 筆どうぞ △ぢや、 △なに、 お台所の工面は △鳶一羽軽なが △會員數も千

つたらう

暴言失禮」と書く丈でも不愉快千

(田丁生)

なに、

Δ

の下に行はれ、

嘗つてある山

吹上温泉を根城として厳格なる統 月下旬一週間十勝岳の中腹にある

٤

る事

快に思つております つて大きな經驗を積み得

を完全に魅了し去って、

秋の

夜長

### 欄部岳山 校學

七月十一日の旅行抑制令

人をして餘りの嚴格さと眞面目

3

て學校 部としてはどこまでも後繼者 Ш 一岳部は如何に對處すべき ふものゝ、中心行事であ 危急存亡の秋とあればそ 來した様であった。國家 れも致し方がないとはい とり止めその他大困亂を ために各學校共合宿の 合宿を半ば封じられ

と云へませう。

故 0 に驚かしめた程のものです。 大山岳班の存在は屍に等しいもの 0 道であり、合宿がなかったら北 合宿をそのま、續ける事が唯一 新體制下の今日と雖も、 從來 それ

ではありますが、合宿を獨立した 行する事に外なりません。 ものとしてらその存在價値は大き 技術的豫備訓練であつて練習なの 元より合宿は山行の為の精神的 合宿な封ずることは時代に逆

か。

か育ていざといふ 時に備えて行く

具

體的にどう切りのけるか真剣に考 指導理念に變りはない筈だが、

へて欲しい。

お導れした敷校から

一つとは情ない。(編輯者)

力を注ぐ積りです。 道内の山に敷班出る豫定です。 、事の出來なかつたペテガリ岳に 今年は昨年種々の事情により行 冬期登山に關しても從來通り、

す。

生

れながら山と何かしら强く

に岳界更新に御盡しの事と思ひま 界も亦多事にて諸氏も御多忙の 夜元氣で精勵致しております。

岳 內

北の

守り」の皇軍の一員として

H

小生唯今この北滿の地で

巖

滿

洲國東安省にて

ひ馳せてゐます。

でゐます。 考となり、 角雪のある時期に登り得て尾根上 、唯一の機會と各班員が力を注い 積雪狀態、 大いに力を得て今年こ 時間等を期の爲の參 ます。

がエキスペデイションの中の重要

幸な事に小生の今やつてゐる任務 の小生の最も樂しい時です。

した。

駒野氏

(地質測量技師)の話は

特に

な研究するのが忙しい軍務の

中で

0)

で、

事の中、

最も大きなものであって 合宿は山岳班の受持つ行

元來、

可能なものとして準備を進めよう

4)

登頂され冬期ではなくとも死も

いのですが我が山岳班では合宿

0

ベテガリ岳は今春五月班

員に依

0

北滿の軍務の明け暮にも山

を對

結びつけられてしまつた小生、こ

照としての生活が續けられており

山か追憶し、山か經驗し山

未だ當局よりその旨の傳達がな

北

大

Щ

岳 部

と思つてゐます。

75 4 る人として、 考へる事は、 人の の考へとして非難さるべきでは 尚ペテガリ岳には亡くなった先 いと思ひます。 意志が傳承されてゐるものと 殊に山岳人である吾 ヒューマニテイのあ

> と解々な北滿の秋も深まり、 の道に精進致しております。

密化させる上に最も大きな役割を

偽すらのです。

我が山岳班の合宿は十二

山

[岳班員相互間の情神的結合を緊

團體訓練を行ふ最も良き會であり

るに現代日本山岳界の趨勢である 合宿か單獨に切り離して考へて見

## 通

和やか

天

津

旅 舍 九月廿

て

田 E

īE

千

### 會 季小集 報 告

十月三日午後六時

集會な、 事の司會により、 夏期暫くの間休會中であつた小 話 人 所 秋風爽かな一夜、 ポルネオジャングルの旅 駒野久德氏 日本橋區日本商工俱樂部 前記の通り 青木幹 開催

の冬の訪れもさう遠いことではあ を想ひ出しながら張り切つて、そ なる部内に隔聯しだ事であります 私達のナンダコートの旅路 北滿の冬にも亦人生に 荒凉 酷寒 た 土的な、 ら後からと、 7 豊富な體驗と知識に厚く裏付けら 探險的な奇異な物語は、 0) 7 水る、 種々な参考品を前にしての、 興味の深いものであった。 た、種々なる意味に於て、 此の赤道直下の未開の國 地誌的な、 止め處もなく流れ出 而して多分に 聽衆一同 後か 極め 風

而して科學的に事物を處理して行

目下天津の客舎で整備中です。 に蒙地の雪便に雪の凍野の旅な想 里塞外陰山の山旅に出ました。 なる秋の阿蘇を後に又も (十月十八日) 夜日) Ξ 旣 南方の一旅行者としてでなく、 める程であつだ。駒野氏が單なる のなほ且つ餘りに短かきを嘆せし と土人を指揮して、

我々は此のレポート的見聞體驗談 餘に亘つて、一つの集團生活を、 務とは云ひ乍ら其處に果すべき一 のである。熱帶の氣候を恐れずに 立派に成し遂げられたと云ふ事に と戦ひ、蕃族や疫病の害毒を排し グルに道を聞き、猛獣毒蛇の危難 つの目的を持つて、多數の本邦人 分け入って、 全くへ跡絶えたる密林の奥地深く 單なる興味以上のものな見出す 彼方此方と其處に年 道なきジャン 公

恒に深く融合して行かうとする、 其處に周圍の環境即ち大自然と、 勞働者群)との困難な集團生活 なジャングルの中での、 と思ふのであるが、それにしても 無事に指導し得られるのであらう 邦人、(而も比較的教養の淺い特殊 や爬蟲類に迄も一種の愛情を感す 疫病を克服し、土人と和み、野獣 るのではないかとさへ思はれる氏 如き人にして、始めて斯のやう 土人と本

ある。 かうとする登山者的な動向が、岳 人駒野氏の中に强くあったればこ たのではあるまいかと思ふので 的態度と信 此の難事業な無事遂行し得ら 言ひ換へれば、 念が、 此 優れた登山 の困難にし

の話、土人の珍奇な言動の話等は 味の深い、且つ意義のあるもので 沼井鐵太郎、田邊主計、名須川渡 交野武一、安江安宣、關根吉郎、 稲田嘉四郎、 織內信彦、今村巳之助、 藤岡鑓藏、中村清太郎、戸田宗吉 神谷恭、藤島敏男、川喜田壯太郎 藤野關夫、青木 昇、黑岩德千代 木村鑛吉、洒井忠一、小倉志郎、 駒野久德、塚本繁松、鈴木 て戴くことにした。 講演内客は、追つて山岳に寄稿し むなく九時半散會した。倘當夜の ぬ思ひを發して會場の都合上、己 あったと思ふ。獣類の習性や夜狩 他に會員外十七名 淺原重繼、井上皓司、五十嵐清三 瀬戸强三郎、 **茨木猪之介、野口末延、初見一雄** へるのではないかと思ふ。斯トる 何にも面白かつた。 **参會者六拾一名、一同尚ほ盡き** 味に於て、此の夜の話は誠に興 當日の田席者は左の通り。 鈴木正俊、麻生卯三郎· 大きな要因の一つであると云 誇りある仕事を成就せしめ得 石原憲治、多賀富藏、三田幸 重雄、石井鶴三、內田桂一郎、 十月役員總會報告 武田久吉、外山義夫 **諸岡一次、小林丘、** A 山口稔一 弘 、横山幹事公務多忙ノ件 承認ノ事の 親子、夫婦ノ會員ノ會費一部滅

十月九日午後六時四十分於事務所 催、 出席、 者鳥山、高頭、木村、

家族會員會費ノ件

ノ件可決、

ソノ率ハ次回

要ニ應ジテ後任ヲ補充ノ事

|康上辭任ヲ申出ラレタルニ付

前田幹事解任ノ件

村尾、 木暮、 富田、 委任、 茨木、 中村、交野。 冠、三木、松井、中原、大島、槇 小島、 古澤、 **料田**。山口, 額田、青木、 沼 武田、 部、部 中司、 塚本、 加藤、 早川。角田、 藤木、榎本、 藤島、高野、 吉阪、 逸見、

一、定款一部改訂ノ件 展ス事ハ好都合ナルモ厚生省ニ トナシテ運行スルコト、スの 好 テ明年度會費ハ二月末日、明後 テハ希望セズ、ヨツテ便法トシ 會費變更ノ件、十一月決定ノ 會計年度變更問題、歷年制二 ・度會費ハ三月末日ヲ納入期限

會計年度ヲ變更セザルコト、ナ 定員ヲ増加セザルコト、ス。 ムナク鮮任セラレタルモノトシ 行不可能トナリタル場合ハ、ヤ 役員ニシテ公務多忙ノ爲會務執 明年废幹事更改ノ件 ショ以テ二月頃ニ延期。 役員定員増加ノ件

> 一、山小屋調査書ノ件 厚生省元施設課ニテ調査セ

現在ノ會報ヲ菊判ノ雑誌トシー 一應否決ノ事。 部市販トナス塚本幹事ノ提案ハ 會報形式變更ノ件

、山岳研究講習會ノ件 山岳會賞ハ理事會ニー任シ、 ノ報告ヲ得テ決定ノ事。 登山年譜、山岳會賞委員委屬 登山年譜ハ尚檢討ノ事

一、山日記内容ノ件 早川、山口兩擔當者檢討ノ上決 適任者アルマア延期トス。

定ノ事。

一、クラブタイノ件 編輯報告、 入會申込者承認決定 二十名 各擔當者ノ報告。

小屋集ハ材料ヲ見み上ニテ出

方法決定ノ事。

講師候補者二公務多忙者多り、

終 身會二變 更

· 尻春男 〈會員番號八九九番、

大

鹿野忠雄著

山

と雲と落人と

右中央公論社

正十三年七月入會〉昭和十六年度 ョ中終身會員二變更

> 塚本間治著 H 本の山々

Щ

と溪谷社

# 右山と溪谷社

受贈會報部報雜誌

日本ハイキングクラブ

明峯山岳會 MMC十一年十號 Trail and Timberline Idugust 1941 日本アルカウ會 熊木アルカウ倉會報九月 津峠の會 Sierraclub Bulletin June 1941 The mountaieer September 1941 Die Alpen iuli 1941 岭九月號

東京市山岳部 廣島山岳會 會報十月號 號東京地學協會 地學雜認九月號 ルカウ趣味九月 部報十月號

山登巡禮俱樂部 號東京登步溪流會 會報十月號 雁ハイキンググループ雁十月號 山小屋十月號 會報十月號 かムス三二號

關東旅行俱樂部 大阪探驅俱樂部 東京アルカウ會 會報十月 旅路十月 白峰十月號

向山雅重著

客

触

登山とスキー社

登山とスキー十月

急に開催

山村小記

Ш

村書院發行

右山村書院

中央公論社 東京峰友グルツペ 日本厚生協會厚生の日本十月 山ヤマノ會 晴山十、 月報十月 十一月

中京山岳會 會報九、十月

東京山ノ會 築地山 武藏山岳會 台灣山岳會 岳會 愈報十月 登山九月十 會報十月 堆石九月號 月

東京山旅俱樂部 綜合北方文化研究會 東京野蛭會 厩城步行會 步行者十六年一號 のびる四號 獨立樹八三號 部華二六號

津峠の食 山鳩岳友會 田中黨氏 峠十月號 地理學評論八月號 山鳩十月號 北方文化第五輯

明確山岳會 MMC十一月 東京地學協會 地學雜認十月號 近代山會 麘 合 會報創刊號 三角點

# 關西支部十月定例役員會

東京質屋山岳部

部報十月

東京登行會 TTK三一號

、十月廿二日 直木、 榎谷、 栗飯原 出席者 本部より派遣の講師決定次第早 本會改組記念講演晚餐會の件 松井、 木藤、 小川、 於支部ルーム 西岡、 (委任) 富田、

、高山深谷寫眞展 會場は大阪 展覽終了後直ちに開催の準備な ガスビルに大體交渉濟み、東京 補者審議決定。交渉のこと 次回研究會及小集會の件

> リカから英國へ注文し本の到着し たのがこの初夏の頃、筧氏はアメ

迎ひの船が三ヶ月も後れた為危 い間に歸朝の爲桑港に待機、

、會員增加促進依賴の件 、役員事務分擔左の通り改 小川、 西岡、栗飯原、研究會 木藤、 支部備付圖書擴充の件 松井、岡書富田、會報 松井、富田、 西岡、富田、直木。 Œ

一、十一月より驟西支部役員會は 決定 本部役員會の前に開催する事と

山の億ひ出 木暮理太氏著 **○**圖書寄贈關西支部 著者より 御寄贈 上下二条

## 所 便 ij

ting Hills の購入經路は時節柄一 以て同氏へ通知を出され、立寄つ なる)に右の書物其他な注文され クの筧太郎氏(今回歸朝、會員と 寸面白い、望月氏が在ニューヨー 今回本會で購入した The Everlus-て交情を温められたいと希望 方々。加藤氏から會員各位への傳 方にあつて本會の為に活動される 名古屋の跡部昌三氏等々。共に地 九州の橋本三八氏、加藤敷功氏、 今月の珍らしい來室者といへば 九州の山へ登られる方々は前

法のついた便法もこれが最後とな ものかうした窮屈の中に何とか方 ◆講演と映畫の會は矢張り會員の たらしい。 同氏の手に入り持参歸朝された

方々に色々御力を借りればならな

こそ無限の强みでなくて何であら 員とな溫く結ぶといふ點で意義の 者絶無の狀態は續いてゐる。これ かつた。有難いと思ふ。意外に骨 深い仕事として續けて行きたい。 ◆依然として入會希望者多く退會 折れる仕事ではあるが、會と會 (塚本生)

## 輯 後 記

とも自ら認める。その點は今後大 面でも未だ本格的とは言へないこ 事そのものの配列といふ技術的な つて決して大きい事を言へた柄で 舊體制ではあるまいか。この號は そこに留ってゐるとしたら、凡そ であらうが、もし編輯子の仕事が の手下に送る、それだけでも相互 定の紙面を埋め、校正かして會員 もなく、自分でも不満である。 まだ幾分さらいつた形のまっであ 陸なけかる一つの手段にはなる 集つた原稿をたべ配列して、一 記

いに研究し改良して行からと思つ

容にあるのであって、今回の原稿 -( ゐる。併し寧ろ問題は原稿の內 無内容だといふのではない)、

併

印刷者 鈴 木 和 男東京市芝區今入町二十六番地 振替東京四八二九 即 和元 日本出版配給株式會社解京市神田區淡路町二丁目九番地 發 東京市芝區琴平町一(不二屋ビル) 刷所 八行所 オカモトヤ 株式 倉 社 本山岳會內 法社人国 頒價二〇 日本山岳會 本阪 價二○錢 印刷納本 印鈴和 刷商店 部店男 松正

して各位に御執筆な願ふ様なこと 又その内には一つの山塊を中心と 或ひは隨筆として優れたものは大 くてもよいのであつて、文學的に ういつた意味で衆人に先んじて我 あるのだから、この會報などもさ 行くことは、日本山岳會の使命で いに歡迎して行くつもりである。 づ巻頭を飾って行きたいと思ふ。 た積極性を持つた論説を以つて先 ものたらしめて行きたい。さうし 々山岳人の進むべき道を示す如き 昨今の登山界を正道に戻し導いて やいもすれば横道にそれ様とする 併しさう硬くばかりなつてゐな 谷山 中 御豫約下さい。 山ス 塚本閣治著 方は必ず年極にて御豫約な願ひます。 1 村 のキ 雑丨 謙

# 誌と Щ

# لح 溪 谷

〇**錢**(送 费圓

本誌は讀者大激增の爲臨時には入手不能につき購讀御希望の

## 日 本 0 山 Þ

初

版 竇 切

目下再版準備中につき初版御買洩の方は書店又は小社へ必ず

蓍 東京附近雪艇 の旅 銭□○綫

スキーの穿き初めから紀行と案内篇より成る初級中級のスキ 絕好の伴侶。

全日本の一流スキー家数十名執筆になる北海道から九州迄の 社と 編溪 新しきスキ I Ø 山旅 **会**二 经圓

年六 度〇 Щ 돖 寫 眞 年 鑑 錢送□○錢

「アルバイン・カレンダー」に代つて登場した堂々たる山岳・ス れる我國初めての寫眞帳。部數に限りあり必ず御豫約下さい。 キーの繪卷。四季の山岳美が二四面のプレートに依つて飾ら

昭和十六年十一月二十八日昭和十六年十一月二十五日

發

して置きます。

(吉阪隆正

スキー登山ツーアの記録。

もやつて見たいと考へてゐますか

その節は御援助の程豫め御願

# 山と溪谷社主催 ス + I 鍛

鍊

0

タ

十二月二十三日夕。於九段軍人會館

會員券四〇錢(ブレイガード、市内運動具店にあり。 講演•馬場忠三郎氏•映画•塚本閤治氏新作六本

田東 日村町六ノ四米京 市 芝 區 Щ と溪谷 社 六振 ○替 四東 九京

# 布水防

# 製

キスリング型 (E式)

ルック

サ

٠,

特

★品質優秀責任保證★

布地見本進早

大 二尺二寸 ニセ・五〇

型 尺 二五・三〇

型 型 一尺六寸五 二〇・九〇 一尺八寸 ==: 10

小 中 大

●ハイキ ング用肩掛バツグ 三世〇

●門田製シュタイクアイゼン在庫品豐富 (公定價格九・五〇)

●テルモス各種 ハイキング用品

東京市神田區神保町三ノ一へ專修大學電停前

片桐テント登 振替口座東京九一一八四電話 九段 88 三二一〇一 Щ 具店